

空  
の  
ほ  
と  
り  
に

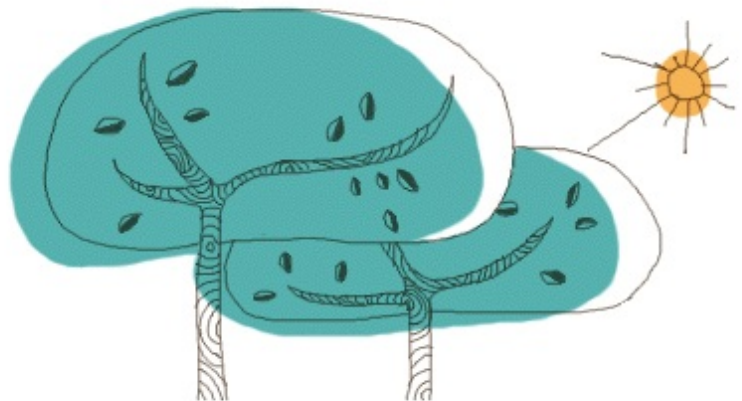


守るものある君守りたく思う梢の風がほどきゆく夏

白き花は白き香を持つ ギボウシ 擬宝珠が開く朝に日照雨は満ちて あした

かなしみも透過してゆく天球をこころのうちに秘めたあなたは

しやくなげ 石楠花の白深くなりその笑みが我のみのものでなしと思へば



はくれん  
白木蓮が静かに花を開くごと君の翼に今はなりたい

伝え得ぬ言葉に風は鳴るばかり白たちあおいが咲くまで待つて

夏雲はほどけて銀の層を成す君のとなりは涼しくもあり

吾が髪に君触れたれば七月の日蔭濃くなる木蓮の下



交差した飛行機雲も染まりゆく夕陽は空を分かつた

手から手へ渡す水蜜桃すいみつ満天の星が瞳に宿る夕暮れ

満月が照らす街路樹つなぎし手好きと聞くのは未だこわかった



いままでの嘘捨て去った八月のバツクミラーに映る雨雲

ゆるやかに浅瀬は続くあいまいな距離水草の影のゆらめき

細き頸のべ水鳥は進みゆく湖水のなかにもそよぐ楡の木

水鳥の羽毛は濡れずひかりつつ我の指まで漂ひてきたり



君の腕まくらで芝に寝ころがるみどりの匂ひ蜜を含みて

あまき声聞きながら閉づまなぶたに晩夏のひかり届かざりけり

ひとしきり笑ひしのちに沈黙の靴のつま先蟻がよぎりぬ

くちづけで世界の色が変わること知りぬまひるの空のほとりに



透明な翼に触れむかつて我ら一対でありし遠き記憶に

鳥が鳥を呼ぶ声遠く草原に雨の気配が満ちてゆく午後

許されること甘受せり薔薇園に落つる夕陽は焰ほむらにも似て



大切なこと思い出せない夕暮れのスープにふたつ花麩浮かべり

いつせいに楓かえでを揺らす風の来て洗い流せり吾の内側を

もんしろが水辺に夢を結ぶごと紅たちあおいは閉じてから落つ

胸に降る痛みは止まず雨に染む紫陽花あじさいいまはそばにいさせて





幾千の風の音叉の鳴る森でさよならだけが響かずにゐた

散らばった楽譜を拾い集むごと秋の日差しに指を重ねる

君とゐた季節は過ぎぬ薔薇の木に薔薇の実がつくそれだけのこと

別々の場所にて別の夢を追ふ君の季節にいつか立つ虹



# 空のほとりに

さとうはな

2012年1月発行

イラスト素材

ふわふわ。り <http://shimizumari.com/fuwa2li/>

